

ハイデルベルク信仰問答より

問 121 なぜ、「天にいます」が付け加えられたのですか。

答え それは、私たちが神の天上の尊厳について、何ら地上的な考えをもたないためであり、ただ私たちが、からだと魂に必要な一切のものを、神の全能の力から期待するためであります。

〔別訳〕

わたしたちが、神の天上の威厳については何か地上のことを思うことなく、その全能の御性質に対しては体と魂に必要なことすべてを期待するためです。

主イエスが祈るとき、「父よ」「わが父よ」「アバ、父よ」といった、とても親しみのある言葉で語りかけておられます。けれど弟子たちに祈りを教えるときには、「天にまします我らの父よ」と呼びかけるように示されました。私自身も、幼い頃から祈りの習慣を持ち、食前や就寝前に「天のお父様」と呼びかけてきました。「天の」という言葉が添えられることで、地上の父とは異なる、もっと大きく、もっと深い存在として、神様に心を向ける助けとなっていたように思います。地上のお父さんとの関係がどのようなものであったかにかかわらず、「天の父」と呼びかけることで、神様にはそのまま私たちの地上の経験を重ねる必要がない——そんな配慮が、そこには込められているのかもしれません。

問 121 では、「天にいます」という表現が加えられた理由を、次のように述べています。「神の天上の尊厳について、何ら地上的な考えをもたないため」「私たちが、からだと魂に必要な一切のものを、神の全能の力から期待するため」、つまり、「天の父」と呼ぶとき、私たちは祈りの相手がただの善意ある存在ではなく、天の權威と全能の力を持った方であることを、心に深く刻んでいるのです。神様は、私たちの願いを「聞くことができる」だけでなく、「応えることができる」お方でもある。その信頼こそが、祈りの土台なのです。

では、私たちはこの「天の父」に、何を願い求めているのでしょうか。「主の祈り」の後半には、その求めの中心となる三つの願いが記されています。

- ① 我らの日用の糧を今日も与えたまえ
- ② 我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ
- ③ 我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ

これらは、体と魂の両方に関わる大切な必要です。日々の糧——それは、食べ物に限らず、衣服や住まい、さらには学ぶ場や働く場など、生きるために必要なあらゆるものを意味します。また、魂にとっての必要——それは何よりも、罪の赦しと、誘惑から守られることです。私たちは、日々の暮らしの中で、目には見えない試みや葛藤、誘惑と向き合っています。その中で神の助け

を求めること、守りと導きを願うことは、心と行動を整え、**隣人と健やかな関係を築くための支え**となるのです。

これらすべての必要を、私たちは「天の父」に向かって祈り求めています。**全能の力を持つお方に向かって——「心を込め」「へりくだり」「信頼して」祈る**のです。反対に、気持ちのこもらない祈りや、心の中で疑いながらの祈りでは、神様との関係はどこかかすんでしまいます。だからこそ、私たちは、**信頼と尊敬に満ちた心で祈ることを大切にしたい**のです。

神様は、遠い天にいらっしゃるようでいて、私たちの祈りの声に、そっと耳を傾けてくださる方です。この方に向かって、からだと魂に必要なすべてを、今日も祈り求めています。